

3 文化的暴力*

本稿は「文化的暴力」(cultural violence)という概念を導入する。そしてこれは筆者が20年以上も前に導入した「構造的暴力」(structural violence)の概念(Galtung, 1969)のフォローアップと見なすことができよう。「文化的暴力」とはここでは暴力の直接的または構造的形態を正当化するために利用される文化の諸側面——それがいかなるものであれ——と定義される。文化にビルト・インされた象徴的な暴力は、直接的暴力や構造にビルト・インされた暴力のように、人を殺したり傷つけたりすることはない。けれどもそれは、そのどちらかまたは両方を正当化するために利用されるのである。たとえば、優秀民族(Herrenvolk)の理論におけるように、である。

暴力の三角形および暴力の層イメージを使って様々のタイプの因果の流れを追い、直接的・構造的・文化的暴力の相互関係が探究される。宗教とイデオロギー、芸術と言語、経験科学と形式科学など文化の分析を用いつつ、文化的暴力の事例が示される。そして文化的暴力の理論がガンディー主義の2つの基本点、すなわち生命の一体性および手段と目的の一体性の原則と関連付けられる。

最後に、平和研究の重要な1つの焦点に文化を包摂することは、平和の探求の深化と見られるだけでなく、未だ存在しない「文化学」(culturology)という一般的な学問分野への可能な貢献と見られるであろう。

1 定義

「文化的暴力」の概念によってわれわれは、直接的暴力または構造的暴力を正当化あるいは合法化するために利用され得る、われわれの存在の象徴的領域である宗教とイデオロギー、言語と芸術、経験科学と形式科学(論理学・数学)などの文化の諸側面を意味する。¹⁾ 星・十字架・新月、国旗・国歌・軍隊行進、あらゆるところで見られる指導者の肖像、扇動的な演説やポスターなどが頭に浮かぶ。しかし例示は第4節にまわし、概念分析から始めよう。上述したように、それは「文化の諸側面」であって、文化全体ではない。「殺人は自己実現である!」と叫ぶ潜在的な殺人者を鼓舞する者は、英語はそうした思想の表現が可能な言語であることを証明しているかもしれないものの、このような英語そのものが暴力的であることを証明するものではない。文化の総体を暴力的と分類することはとうていできない。文化的暴力の例示として、「Cなる文化は暴力的である」といった文化的な画一性を示す表現より、「Cなる文化のAなる側面が文化的暴力の1例である」といった表現がより好ましい所以である。

他方において、文化は、暴力の唯一一つの側面だけではなく、すべての文化的領域にわたる広大にして多様な暴力の側面の1つの集合{A}として想像され得るし、また遭遇され得る。ゆえに文化的暴力の各々の場合について語ることから、暴力的な文化について語ることへ歩を進めることが許されよう。そのためには体系的な一連の研究が必要となる。本稿はそうした過程の一部をなすものである。

1つの出発点は、その否定を探究することによって「文化的暴力」とは何かを明らかにすることである。もし暴力の反対が平和である——まさにそれが平和研究／平和学の主題にほかならない——としたなら、文化的暴力の反対は「文化的平和」であろう。これは直接的平和または構造的平和を正当化・合法化する文化の諸側面を意味する。

1つの文化にそうした種類の広範な諸側面が見出されるのであれば、われわれはそれを「平和の文化」と呼ぶことができよう。平和研究の主要な仕事、そして一般的な平和運動は、そうした決して終わることのない平和の文化の探究となる。

しかし、それは問題含みである。なぜなら、そうした文化を制度化しようとする誘惑がそこから生まれ、そしてそれをあらゆるところで内面化しようとする望みとともに、義務的なものとなるからである。それは1つの文化の押し付けであり、すでに直接的暴力にほかならない。²⁾

文化的暴力は、直接的・構造的暴力が正しい、あるいは少なくとも間違いではないと見させ、さらには感じさせるものである。ちょうど政治学が権力の行使および権力の行使の正当化という2つの問題に関わっているように、暴力研究は暴力の行使および暴力の行使の正当化という2つの問題に関わる。その心理的メカニズムは内面化ということである。

文化的暴力の研究は、直接的暴力の行動および構造的暴力の構造が正当化され、社会に受け入れられるようにする方法に焦点を当てる。文化的暴力が機能する1つの方法は、1つの行動の社会的色合いをレッド／誤から、グリーン／正あるいは少なくともイエロー／受容可能へと変えることである。例えば、「国による殺人は正しい、しかし個々人による殺人は誤りである」といったことである。

もう1つの方法は現実を不透明化し、われわれに暴力的な行動や構造を見えなくさせるか、少なくとも暴力的と見させないことである。明らかにこれは、ある形態の暴力について他よりもより容易に行われる。たとえば人工流産 (abortus provocatus) である。

ゆえに平和研究は、ちょうど健康学が病理学を必須とするのと同様に、暴力の分類を必須とするのである。

2 直接的・構造的暴力の分類

私は暴力を、人間の基本的必要、より一般的には、生命に対する侵害である——ただし回避可能な——と考える。そのことによって、必要の充足の現実的レベルを潜在的に可能なレベルよりも低下させるのである。暴力の脅威もまた暴力である。

直接的・構造的暴力の区別と、基本的必要の4つのクラスとを組み合わせると表1が得られる。世界の多くの場所での集中的な対話の成果として得ることのできた4つの必要とは、生存の必要 (死および死すべき運命の否定)、福祉の必要 (悲惨および病的生活の否定)、アイデンティティーすなわち生の意味の必要 (疎外の否定)、および自由の必要 (抑圧の否定) である (Galtung, 1980a)。

結果は、暴力の8タイプといくつかのサブ・タイプであり、直接的暴力に関しては容易に同定できるものの、構造的暴力に関してはより複雑である (表1参照)。最初のコメントとし

では、表1は人間中心であることが指摘できよう。人間存在のための必須要件である（人間以外の）「その他自然」のために、最最初に第5のコラムが付加され得る。環境システムの保全のために最も頻繁に人が目にするのは、おそらく「エコロジカル・バランス」という用語であろう。このことが満たされないならば、環境の退化、破壊、バランスの崩壊が結果するであろう。

エコ・バランスは、基本的な人間の保全のために、生存+福祉+アイデンティティー+自由に対応するものである。以上5つの合計が全体として「平和」を定義するであろう。これが満たされないならば、結果は人間の退化である。

表1 暴力の分類

生存の必要 福祉の必要 アイデンティティーの必要 自由の必要			
直接的暴力 殺戮	不完全	非社会化	抑圧
	攻囲、制裁	再社会化	拘禁
	悲惨	二級市民	追放
構造的暴力 搾取 A	搾取 B	侵入	周縁化
		細分化	分裂

しかし、「エコ・バランス」はきわめて広い概念であり、非生物相および生物相を包含する。生命への侵害を意味する暴力は、生物相に焦点を当て、非生物相には間接に焦点を当てるのみである。

さらに困難かつ重要な問題がある。「誰のためのバランスか」という問題である。人間が自分自身を再生産するためか？ 経済活動のどのレベルにおける再生産なのか？ 何回？あるいは、「環境」——何と人間中心的な用語か——が、それ自体を再生産するためか？ すべての部分の再生産？ 平等に？ どのレベルにおける？ 何回？あるいは、人間と環境の両方ともの再生産か？

第2に、上表で使われた暴力を表す言葉のメガ・バージョンも考慮されねばならない。「殺戮」は、皆殺し・ホロコースト・ジェノサイドと読める。「悲惨」は、静かなホロコーストと読める。「疎外」（の様々な表現）は、精神の死と読める。「抑圧」は、グーラグ/KZ（強制労働収容所）と読める。「エコロジカルな退化」は、エコサイドと読める。これらすべてはオムニサイド（万物絶滅）と読める。

過去50年において、ヒトラー・スターリン・レーガン⁴⁾・日本の軍国主義といった名前と密接に関わって、世界がこうしたすべてを経験しなかったならば、これらの言葉は誰かの黙示録的な仕事のようなものである。要するに、暴力研究は平和研究の不可欠な部分なのである。それは恐怖の収納箱である。しかし病理学と同じく、それは知られるべきそして理解されるべき現実を反映しているのだ。

さらに上表そのものに関していくつかコメントしよう。暴力の最初のカテゴリーである殺戮は、十分に明瞭である。不完全にすることも同じである。これらを合わせると、それは「死

傷者」——戦争の規模を評価するのに用いられる——を構成する。

しかし「戦争」は通常、政府という少なくとも1つのアクターをとまなう、組織された暴力の特殊な1形態にすぎない。平和を戦争の反対と見ること、ゆえに平和学を戦争回避の研究に制限することは、何と視野が狭いことか。さらに平和学を、(大国間または超大国間の戦争と定義される)大戦争または超大戦争の回避に、もっと言えばスーパー兵器の制限・廃棄・制御に限定することは、言わずもがなであろう。

これでは種々の暴力間の重要な関連性がとり残されてしまう。とりわけ、暴力の1つのタイプの減少ないし制限が他のタイプの増大ないし維持という犠牲のもとに行われることが見失われてしまう。健康学における「副作用」と同じく、それはきわめて重要であるものの、容易に見過ごされてしまうのだ。平和研究はこうした誤りを避けなければならない。⁶⁾

不完全にすることのもとに含まれるものは、攻囲／幽閉(古典的用語)や制裁(現代的用語)によってもたらされる、人間の必要に対する侵害である。これは、ある人々にとっては「非暴力」である。というのは直接的かつ迅速な殺人ではないからである。しかしながら、被害者にとっては、それは栄養悪化や医療不足を通じて、緩慢なしかし意図的な殺人を意味するであろう。

因果の連鎖を長くすることにより、暴力に直接的に向き合わなければならないのを行為者は回避する。彼は「被害者にチャンスを与えよう」とさえる。通常は、降伏させるために。生命および四肢を得るかわりに自由およびアイデンティティーを失うのだ。後二者との引きかえに前二者を得るという取引をするのだ。しかしそのメカニズムは、攻囲・ボイコット・制裁によってもたらされる、生に対する脅威なのである。ガンディー・タイプの経済的ボイコットは、英国繊維の購買の拒否を商人のための基金の募集と結合させることであった。彼らの生活を脅かすことによって問題を混乱させないためであった。

「疎外」のカテゴリーは、社会化という用語によって定義することができる。すなわち、文化の内面化である。ここには2つの側面がある。自分自身の文化からの脱社会化、および他の社会への再社会化である。たとえば、言語が禁止されたり強要されたりするように、である。これらは相互に前提しあうことはない。しかし、二級市民のカテゴリーの場合のように、それらはしばしば同時にやって来る。

被支配者グループ(必ずしも「少数者」ではない)が、少なくとも公共の場において、(自分の文化ではない)支配的文化による表現を強制されるのである。この問題はもちろん、子供の社会化の場合につねに起こる。家庭において、学校において、そして大きくは社会において、子供の社会化は強制——洗脳的一种である——とされ、子供に選択肢を与えないのである。ここからは、子供たちに、1文化のイデオロム以上の選択肢を与えることによって、非暴力的な社会化の選択肢を子供に与えることが結論されよう。

「抑圧」のカテゴリーも同様の二重の定義をもつ。歴史的・文化的制約をとまないつつも、国際人権規約の「～からの自由」と「～への自由」とである⁷⁾(Galtung, 1988a)。暴力の他のタイプに付随するものとして重要性をもつ2つのカテゴリーが明示的に追加された。人々

をその中（監獄、強制収容所）に閉じ込めておく拘禁、および人々をその外（海外、国内の僻地）に隔離しておく追放とである。

構造的暴力に関するカテゴリー・用語・言説を議論するためには、様々な側面がいかにして必要というカテゴリーに関連しているかを見るために、われわれは暴力的構造のイメージをもつ必要がある。

暴力的構造のアーキタイプ（元型 archetype）として、私見によれば、搾取がある。それは中心的な重要性をもっている。これは単に次のことを意味している（必要という流通語で測定している）。構造における相互作用において、「勝ち組」（topdog）がその他の「負け組」（underdog）より多く獲得するということである（Galtung, 1978, parts I-III）。

ここには「不等価交換」がある。しかしこれは婉曲語法である。負け組は利益を被るためついには死に至る（飢餓、病気による極度の衰弱）。これを搾取 A と呼ぼう。あるいは、悲惨という永久的なそして欲していない状態に彼らは置かれる。栄養不足や体調不良の状態で、これを搾取 B と呼ぼう。人々の死に方は異なる。第三世界においては、下痢、免疫不全などからである。「先進」諸国では、心臓－血管系統疾患、悪性腫瘍などからである。これらはすべて複雑な構造の中で起こり、高度に枝分かれした因果の連鎖とサイクルとの結果として起こるのである。

暴力的な構造は、人間の身体だけではなく精神や魂にも痕跡を残す。次の4つの用語は、搾取の部分または構造を強める要素と見なすことができる。搾取に対する闘争の有効な2つの条件である、意識形成および行動化を妨げることによって、それらは機能するのである。侵入とは、負け組の中に勝ち組を言わば植え込むことである。このことは細分化と結びついて行われる。細分化は、負け組に、何が行われているかに関してごく部分的な視野しか与えないことによって行われる。こうして第一の仕事が行われる。

そして周縁化とは、負け組を外部に置いておくことである。これは分裂と結びつき、負け組を相互にバラバラにさせるのである。こうして第二の仕事が行われる。

しかし、これらの4つの要素は、それ自身の権利において、構造的暴力と見られなければならない。さらには、とりわけ構造的にビルト・インされた抑圧という一般的な主題の変奏と見られなければならない。要するに搾取と抑圧とは暴力として相補的に行われる。しかし、それらは同じものではない。

自然に対する暴力はどうか。戦時における、伐採、火災などの直接的暴力がある。このような暴力の構造的形態は、知らぬ間に進行し、自然を意図的に破壊するのではないものの、自然破壊には違いない。

現代の産業と関わって、汚染や枯渇があり、森林の荒廃、オゾン・ホール、地球温暖化などをもたらしている。何が起こっているのかと言えば、産業活動を通じる自然の破壊であり、それは、非分解性の廃物を残し、非再生資源の枯渇をもたらしている。

これは世界規模の商業化と結びつき、その帰結を加害者には見えなくしている。⁸⁾ 経済成長によって正当化された、2つの実に強い力が働いている。「持続可能な経済成長」という

仲間内の通用語は、文化的暴力のさらにもう 1 つの形であるのかも知れないのだ。

3 3つのタイプの暴力を関係付ける

これらのコメントとともに、表 1 に与えられた種々のタイプによる拡張において「暴力」は定義される——直接的・構造的暴力を包括概念すなわち「スーパータイプ」として用いることによって。

「文化的暴力」は第 3 のスーパータイプとして付加され、1 つのイメージとして、(悪の)暴力の三角形の 1 つの角に置かれることができる。三角形がその「直接的」および「構造的暴力」の足の上に置かれるとき、喚起されるイメージはその両者を正当化するものとしての文化的暴力である。

三角形がその「直接的暴力」を頭に置かれるとき、そのイメージは直接的暴力の構造的および文化的な源泉である。もちろん、三角形はつねに三角形である。しかしそれが生み出すイメージは異なる。その 6 つの位置 (3 つは下方に向い、3 つは上方に向う) はそれぞれ異なる物語を喚起し、そのすべてが物語る価値がある。

その対称性にもかかわらず、暴力の 3 つの概念の時間に対する関係は基本的に異なる。直接的暴力はイベントである。構造的暴力はプロセスであり、浮き沈みがある。文化的暴力は不変量 (invariance) すなわち「永続性」(permanence) であり (Galtung, 1977, ch.9)、基本的文化の緩慢な転換を除けば、長期にわたって本質的に同一であり続ける。

歴史におけるフランスのアナール学派の便利な用語を使えば、「出来事 (événementielle) ・状況 (conjuncturelle) ・長期持続 (la longue durée)」である。暴力の 3 つの形態は時間の中に違った形態で入って来る。地震の理論と同じように、出来事としての地震、過程としてのプレート・テクトニクスの運動、より永続的な状況としての断層である。

このことは暴力の現象学において、暴力の層イメージ (三角形イメージと相補的) に導く。それは種々の仮説を生み出すパラダイムとして有用である。

最下層には、時間に貫通する文化的暴力の恒常的な流れがある。それは他の 2 つの暴力がそこから滋養分をとるサブ層である。次の層には、構造的暴力のリズムが位置する。意識化が阻害される侵入と細分化、および搾取と抑圧に対する組織化が阻害される分裂と周縁化という付随物をともないつつ、搾取の様々なパターンが形成され、使い果たされ、解体される。そして最上層は、粗野な目とはだしの経験主義にも見える直接的暴力の層である。そこでは人が人に対して、および他の生命の形態と自然に対して、直接的な残虐行為が行われるのである。

一般的に、文化的から構造的を通して直接的暴力に向う因果的な流れが認められる。文化は説教し、教え、論じ、扇動し、われわれを鈍くし、搾取そしてまた抑圧を正常かつ自然なものに見させるか、あるいはそれら (とりわけ搾取) を見させない。そして爆発が起こる。構造的な鉄の檻から脱出しようとして直接的暴力が行使される (Weber, 1971)。すると、檻を無傷にしておこうとする対抗暴力が起こる。

通常の犯罪行為は、負け組が「脱出」し、富を再配分し、仕返しをし、復讐しようとするこ

とから発生する（「ブルーカラーの罪」）。あるいは、誰かが残存し、勝ち組になり、構造からそれに値するものを吸い取ろうとすることから発生する（「ホワイトカラーの罪」）。

直接的・構造的暴力の両者は必要の不足を生じさせる。このことが起こると、突然われわれはトラウマを語るができるようになる。このことがグループや集団に起こると、集合的トラウマとなり、それは集合的下意識に凝固し、主要な歴史的プロセスそしてイベントの素材となる。

その底にある仮定は簡単である。すなわち「暴力は暴力を生む」。暴力とは必要の略奪である。必要の略奪は深刻である。1つの反作用は直接的暴力である。しかし、そのみが唯一の反作用ではない。絶望の感覚があり得る。略奪された状態／不満足シンドロームは、内に向かっては自暴自棄として現れ、外に向かっては無関心や撤退として現れる。

大量的な必要の略奪に対する反作用として、沸騰した暴力的な社会か、凍てついた無関心の社会化の選択に迫られるとき、勝ち組は後者を好む傾向がある。彼らは「トラブルやアナーキー」より「ガバナビリティー」を好む。彼らは「安定性」を愛しているのだ。

実際、支配的エリートによって行われている文化的暴力の主要な形態は、ガラスの窓に向かってではなく、鉄の檻から脱出しようと最初に石を投げた構造的暴力の被害者を、侵略者として責めることなのである。構造的暴力の範疇は、こうした文化的暴力の姿を明らかにするのである。

けれども、暴力の層イメージは、暴力の三角形におけるただ1つの因果的関連だけを定義するのではない。すべての6つの方向に関連と因果的流れがあり、3つの連結するサイクルはどの点からも出発できるのである。暴力の三角形が3層モデルよりも時にはより良いイメージを与えうることのこれは良い理由である。

アフリカ人は捕らえられ、奴隷として働くために大西洋を渡ることを強制された。何百人ものアフリカ人はその過程で殺された——アフリカにおいて、船上にて、そしてアメリカにおいて。

何世紀にもわたるこの大規模な直接的暴力は滴下し、大規模な構造的暴力として沈殿した。白人は主人としてトップドッグになり、人種差別の思想をともなう大規模な文化的暴力を生産し再生産した。かなりの時間の経過後、直接的暴力は忘れられ、奴隷制は忘れられ、そして単に2つのラベルが姿を見せた。

学校教科書のための青ざめた言葉として。大規模な構造的暴力には「差別」が、大規模な文化的暴力には「偏見」という言葉が当てられたのだ。言葉の公衆衛生は、それ自体が文化的暴力であるのだ。

暴力の悪循環は構造的暴力の角からも開始されることができる。社会的分化は、増大する不平等交換をともしつつ、徐々に垂直的性格を帯びる。そして、このような社会的事実(social facts)は、その維持のために社会的行動(social acts)と、それらを正当化する文化的暴力とを探し求めるだろう。

これは、「唯物論的」な（構造的、を意味する）マルクス理論の一般化である。あるいはま

た悪循環は、結合した直接的・構造的暴力からも始まることが可能である。1つのグループが他のグループをあまりにも酷く扱い、彼らはその正当化の必要性を感じ、彼らに渡されるいかなる文化的理由付けをも、切望し受け入れるのである。

千年以上も昔、北欧諸民族のヴァイキングは、ロシア人を攻撃・詐取・殺戮した。そのことは、ロシア人は危険で粗野で野蛮であるという思想の形成のための十分な理由となったに相違ない。このことは、いつの日か彼らは戻ってきて、われわれが彼らにしたことを彼らはわれわれにするであろう、ということの意味する。⁷⁾

実際、1940年4月、ドイツがノルウェーを攻撃したとき、公式の結論は、ロシア人はいつかわれわれと同じことを行うから危険であるというものであった。ここには奇襲のトラウマがある。

遺伝的に伝達された性向、あるいは少なくとも攻撃(直接的暴力)および支配(構造的暴力)のための本来的性向をとまなう、より深い層、人間の本質はあり得るのだろうか。直接的・構造的暴力を行う人間の潜在能力は確かにある——人間には直接的・構造的平和のための潜在能力があるように。しかしながら、私見によれば、食物やセックスを求める衝動に比較し得る、人間性における攻撃や支配を求める衝動を仮定する生物学的決定論に対抗する最も重要な議論は、攻撃性および支配性における高度な可変性である。

われわれは、人々が(ほとんど)すべての外的状況のもとで食物やセックスを追い求めることを見出す。しかし、攻撃および支配は、構造的・文化的条件をも含め、コンテキストに依存する著しい変化を示す。あらゆる条件のもとで自己を強いることが十分に強くないため、もちろん衝動がそこにあるかもしれない。この場合、平和研究者の関心は、そうした状況を知ることであり、それらを取り除きまたは変形するための方法を探究することであろう。ここでの私の仮説は、「構造」や「文化」という2つの用語がこのような探究に不快をいなくことなくわれわれを順応させる、ということである。

1つの重要な収穫をこの分類学的な練習から刈り取ろう。過程としての軍事化(militarization)の概念、そしてその過程に付随するイデオロギーとしてのミリタリズム(militarism)の概念の明確化にわれわれはその練習を用いることができる。明らかに1つの側面は、それが挑発されたものか否か、紛争を解決しようとするものか否かにかかわらず、実際のまたは危機にあおられた軍事的な行動という形における、直接的暴力への一般的な傾向である。この傾向はハードウェアとソフトウェアの適正な生産および配備を結果としてもたらす。

しかし、軍事化を過去の軍事行動の記録、および現在の生産と配備のパターンからのみ研究することは表面的であろう。¹⁰⁾ このことは、人・予算・軍備管理に関する安易な結論に導くであろう。良い草刈りはその根元に至ることを想定する。この場合は、3層パラダイムに示されるように、構造的および文化的な根元である。具体的には、このことは軍事的行動、生産、配備の準備を再生産する構造的・文化的側面を認識することである。これには、学校の若い男子をモップ化すること、長子相続制¹¹⁾、失業、および搾取一般が含まれる。さらに

は、経済の成長と分配を促進するための軍備の生産と配備、高度な国家的・人種差別的・性差別的なイデオロギー等¹²⁾の利用である。高校や大学のカリキュラムや構造に軍事教育・演習を構築すること¹³⁾と、文化としてのミリタリズムを拡散することとの組み合わせは、特別な注意を必要とするであろう。しかしこうした構造と文化は通常、「軍備管理」研究には含まれていない。両者は高度に微妙な分野であるからだ。こうしたタブーは打破されねばならない。

4 文化的暴力の事例

いまやわれわれは、導入部で述べた文化の6つの局面、すなわち宗教とイデオロギー、言語と芸術、経験的および形式的科学に戻ることにしよう。そして、それぞれの曲目における1つないし2つの文化的暴力の例を与えることにしよう。このスキームのロジックは簡単である。文化的要素を取り出し、経験的にも潜在的にもそれがどのように直接的または文化的暴力を正当化するのに利用されるかを示す。

4-1 宗教

すべての宗教にはどこかに聖なるもの‘das Heilige’があり、われわれはそれを「神」(god)と呼ぶ。基本的な区別は、われわれの外にある超越的な神(God)と、われわれの内にある(おそらくはすべての生命の内にある)神(god)との間につけることができる。¹⁴⁾

およそ4000年前に作られた、トーラー(律法)に基づくユダヤ教においては、男神としての神(God)は地球という天体の外に住んでいる。これは破局的(catastrophic)な思想である。これは超越主義のメタファーの明らかなケースであり、ここからは多くの帰結が出てくる。それらは他のユダヤ的および西洋的な宗教、すなわちキリスト教およびイスラムによって取り入れられた。

われわれの外に神(god)が神(God)として存在することにより、さらにわれわれの「上」に存在することにより(「天国にましますわれらの父なる神よ」)、不可避ではないにしても、ある人々は他の人々より神に近い、さらには「より高い」と見られるであろう。もっと言えば、善と悪のはっきりとした二元論をもつ、二分法だけではなくマニケイズムの西洋的伝統においては、対称性の理論から、善なる神(God)に対して悪い悪魔(Satan)のようなものがなければならない。ここでも再び超越的そして内在的な表現が可能となる。神(God)と悪魔(Satan)が自分自身を所有するか、少なくとも選択するのだ。あるいは、神(god)または悪魔(satan)——神(god)そして悪魔(satan)は言うまでもなく——、すべての組み合わせが西洋のすべての宗教に関して見られる。しかしここでは、焦点はハード・バージョンに、すなわち超越的な神(God)および超越的な悪魔(Satan)の信仰に置かれるのである。

神(God)は誰を選ぶのか? 表2に示されているように、神は自分のイメージ一番近いものを選び、他の者を悪魔(Satan)に残しておくとは仮定するのが合理的ではなかろうか。このことはわれわれに二重の二分法を与える。神、選ばれた者(神によって)、選ばれなかった者(神によって、悪魔によって選ばれた)、そして悪魔である。

選民は救済と天国において神に近いことを目指す。非選民は、破壊と地獄において悪魔に近いことのためにある。しかしながら、天国と地獄は、死後の味見または適応のために、地上でも再生産されることが可能である。悲惨／奢侈は、地獄／天国のための練習と見ることができる。そして社会階級は、神の指と見るができる。

われわれの内に住む神（god）の内在的概念は、こうしたいかなる二分法をも神に反するとする。しかし外在的な神（God）によって、こうした二分法は意味をもつようになる。表2の最初の3つの選びは、『創世記』に見える。最後の選びは、『新約聖書』に典型的であり、正しい行いだけでなく、正しい信仰に焦点を当てている。他の2つは、奴隷に関しては散在して、および「カエサルのはカエサルに、神のものは神に返せ」に関して言及されている。

神により近いと言及されている上層階級とは、実際には伝統的に聖職者・貴族・資本家の3階級である。聖職者は、神との伝達をいかに行うかに関する特別な洞察を有するという理由からである。貴族は、とりわけ「神の恩恵」（*rex gratia dei*）による。資本家は、もし成功したなら、である。下層階級および貧しい人々もまた選ばれ、天国に最初に入る者とされている（山上の垂訓）。これら6つの選びが一緒になってハードなユダヤ教・キリスト教・イスラムを構成している。それらはいくつかの立場を放棄することによって、よりソフト化すること

表2 選民と非選民

神は選ぶ	悪魔に残す	結果として
人類	動物、植物、自然	種差別、エコサイド
男	女	性差別、魔女狩
彼の民族	その他の民族	ナショナリズム、帝国主義
白人	有色人種	人種差別、植民地主義
上層階級	下層階級	階級差別、搾取
真の信仰者	異教徒、無宗教者	能力主義、異端審問

ができ、より内在的な神（god）を採用することによって、よりソフトなユダヤ教、よりソフトなキリスト教、よりソフトなイスラムに転化することができる（スーフィズム、アッシジのフランチェスコ、スピノザ）。

表2の右端の結果は、選民思想の神学以外からの前提からも導出できる。表は単に十分な諸要因のための一助をなすだけにすぎない。

現代の事例として、パレスチナ人に関するイスラエルの施策を考えよう。選ばれた人々は、約束された土地（*Erets Yisrael*）をさえもっている。彼らは期待されたように行動する。彼らは選民性、すなわち文化的暴力の悪意あるタイプを、直接的・構造的暴力の8タイプに翻訳する。殺戮が行われる。ヨルダン川西岸地区住民の生活の必要が拒否されることにより、人々は不完全にされ、物質的な手段が奪われる。イスラエルの神権政治の内部で、非ユダヤ

人の二級市民化を内容とする脱社会化が行われる。拘禁や個人的放逐があり、大衆的放逐の永久的脅威がある。少なくとも搾取 B としての搾取が存在する。

搾取の 4 つの付随物は、よく展開されている。パレスチナ人を生まれながらの負け組と自分を思わせ、せいぜい「慣れる」ことによって二級市民に自分を仕向けるために注力すること、経済活動の小さな部分をしか彼らに与えないこと、グリーン・ライン〔1949 年の第 1 次中東戦争の停戦ライン〕の内外において彼らをユダヤ人社会から外部に締め出すこと、そしてパレスチナ人を分割して統治せよ (divide et impera) 方式で扱い (キャンプ・ディビッドプロセスにおけるように)、決して 1 つのピープルとして扱わないこと、である。大量虐殺も大量搾取もここにはない。後者は、債務に苦しむ多くの第三世界の国々で見られるものであり、とりわけ子供が犠牲になる。暴力が 8 タイプのレパトリのすべてに一様に分布しているのだ。ヒトラー的またはスターリン的な虐殺、そしてレーガンの搾取 A によって規定され、ゆえに低い位置からものを見る人にとっては、このことは、なんら大量の暴力を行っていないイスラエル人は何と人間的であることかの証明であるかのようだ。しかし、このような見方もまた文化的暴力の事例であり、今世紀において道徳的規範がどうなってしまったかを示すものにほかならない。¹⁵⁾

4-2 イデオロギー

世俗化を通じる超越的のみならず内在的な神の没落、そしておそらくはその死にともなって、われわれは、宗教の後継者を政治的イデオロギーという形の中に、神の後継者を近代国家という形の中に、見出すことになるだろう。宗教と神とは、死んだのには相違ない。しかし、はっきりとしたそして多量の価値を含んだ二分法 (dichotomies) というのはかにより基本的な思想は、死ななかった。線はもはや、神、選民、非選民および悪魔の間には引かれなくなった。

近代は神と悪魔を拒絶するにしても、選民と非選民との区別は要求する。われわれはそれを選ばれた者と選ばれざる者、すなわち「自己」(Self) と「他者」(Other) と呼ぼう。アーキタイプは、すなわち、神の後継者としての国家をとまなうナショナリズムである。

険しい傾斜が作られる。それによって「自己」の価値を高め、讃美しさえする一方、「他者」の価値を低め、墮落させさえする。この点に至れば、構造的暴力が機能し始める。それは予定どおりに成就させる予言となる傾向がある。人々は搾取されることによって墮落させられる。そして彼らが搾取されるのは、彼らは墮落し非人間化していると見られるからなのだ。「他者」が非人間化させられているだけでなく、成功裏に、「それ」(it) すなわち非人間に変えられるとき、舞台はあらゆるタイプの直接的暴力が生起する場となる。¹⁶⁾ そして、その直接的暴力の非難が被害者に浴びせられるのだ。

このことは次に、(ヒトラーがユダヤ人に関して使った)「危険なそれ」「害虫」「細菌」、(スターリンが「クラーク」〔ロシアの富農〕に関して使った)「階級の敵」、(レーガンがカナダについて使った)「狂暴な犬」、(ワシントンの専門家たちがテロリストに関して使った)「狂った犯罪者」といった範疇によって強化されるのだ。こうして絶滅が心理的に可能な義

務となる。SS 親衛隊が義務への献身で祝福すべき英雄となる。

表 2 の 6 つの次元を使って、選民たちがいかなる超越的な神がなくても、選民であり続けるかをわれわれは容易に見てとることができる。人間だけが自己反省することが可能であるようだ。男は女よりも強い／論理的である。ある民族は、文明とその歴史的過程のキャリアであるという意味において、他の民族よりも近代的である。白人は非白人よりも知性的／論理的である。近代の「機会均等」な社会では、最良の者がトップに立ち、ゆえに権力と特権が与えられている。そして、近代化・開発・進歩への信念が必然と見られている。それへの不信は、その信念に対してではなく、信念をもたない者に対して悪い影響があると見られている。

西洋文化において、これらすべての思想はこれまでも強力であったし、いまもそうである。けれども、男・西洋人・白人に関する生得の優越感は、女、非西洋（西洋を凌駕する日本経済の成功など）、西洋社会の内部の有色人種によって、いまやひどく揺さぶられている。地上で最もキリスト教的な国である米国は、これらの闘争に米国内外において主要な戦場を提供してきた。ゆえに米国の文化的暴力を低減させることは、きわめて重要となる。なぜなら、米国は他国に対してまさにそのあり方のトーンを示す国であるからだ。

これら 3 つの仮説——生得的なジェンダー、人種、民族という各々その理由をもった区別に基づいている——は、業績志向の社会では、維持することが困難である。しかし、もし社会が能力主義であるのなら、トップの権力や特権を否定することは、能力そのものを否定することになる。「現代的志向」の最小限でも否定することは、いかなる信念にもその場を開くことになり、実力者の権力や特権、人間の生命と他の形態の生命との厳密な区別を否定することになる。要するに、残余の選民意識が、神や悪魔の地位にかかわらず、しばらくの間は、「種差別」「階級差別」「能力差別」として残ることになる。

ナショナリズムのイデオロギーは、選民の形姿に基づき、宗教またはイデオロギーを通じて正当化され、国家のイデオロギーすなわち国家主義 (statism) との連関のもとに見られるべきである。戦後日本の平和憲法における第 9 条——いくらかの文化的平和を作ろうとする短命の努力——は、「〔日本〕国家の交戦権は、これを認めない」ことを明文化した。明らかに日本は、その権利を喪失していた。しかし他国は、おそらく戦勝国は、その権利とともに無傷で、たぶん高揚して、戦争から退場したのだった。

あの交戦権はどこから来たのか。中世にその起源がある。「君主の最後の手段」(Ultimo ratio regis) を得るために「神の恩恵」(rex gratia dei) の大権からの直接の持越しである。そうして国家は、ますます増大する陸海軍の高価な費用をまかなうための十分な租税を（1793 年からは兵を）、君主がきびしく徴収（徴集）するための組織と見られるようになった。国家は軍を維持するために創造されたのであって、その逆ではない。

しかし、生命の創造ではないにしても、生命を破壊する（死刑を執行する）権利を継承することにおいて、国家はまた神の継承者とも見られる。多くの人は国家について、妊娠した女にすぐる権威を行使し、生命の創造をコントロールする権利をもつものと見なしているの

だ。

ナショナリズムを「自己－他者」の険しい傾斜と、国家主義 (statism) を究極の権力を行使する権利と (義務さえ) 結び合わせれば、われわれは民族国家 (nation-state) の醜悪なイデオロギーを得る。これはもう 1 つのカタストロフィックな思想である。戦争における殺戮は、いくらか民族的特徴を共有するすべての市民を包含する、民族の名において行われる。デモクラシーの新しいアイデアは、「人々の声」(vox populi) や「神の声」(vox dei) といった移行的な定式とともにもたらされる。死刑もまた「国家 X の人民」の名のもとに行われる。しかし戦争のように、それは国家の命令のもとに行われる。

墮胎に反対する生命を大切に思う感情の大部分は、母親の決定に基づく墮胎が生命に対する国家の独占権を侵害するという感触におそらくは根差している。もし墮胎に反対する感情が本当に胎児の聖性 (homo res sacra hominibus) の感覚に根差しているのであれば、生命を大切に思う人々は平和主義者でもあるだろう。彼らは死刑に反対するであろう。そして米国や世界の他の国々において、黒人の死亡率が高いことに憤慨するであろう。もちろん、生命よりも選択に優先権を与えることは、胎児を「それ」(it) と見なし、人間としての胎児の生命の否定に基づく、文化的暴力のもう 1 つのタイプにほかならないのだ。¹⁷⁾

国民国家のイデオロギーを神学に基礎付けられた選民思想に結び付ければ、その複合体は、大惨事の舞台となる。イスラエル (ヤハウェ)、イラン (アッラー)、日本 (アマテラスオオミカミ)、南アフリカ (オランダによって「変形」された神 [God])、米国 (ユダヤ・キリスト教的ヤハウェ・神 [God]) は、危機においては何でも起こり得る比較的明らかなケースである。ナチ・ドイツ (ナチ [the Nazi] オーディン／ヴォータンー神 [God]) は、同様のカテゴリーである。

ゴルバチョフ下のソ連は (彼は、61 年間の停滞の後、レーニンの後継者と自分を見なしている)、おそらくは選民としての使命のもとに苦闘している。この場合の選民とは、社会主義に入った最初の民族国家として、歴史 (大文字の h で書かれた History) によって選ばれたという意味である。そしてフランスも同様の優越複合をもっている。ただし、選ばれるという思想はフランス以上の何かが存在することを示唆するから、それには耐え難い。ゆえに、「フランスは自分を自分で選んだのだ」(un peuple élu, mais par lui-même)。このアーキタイプはナポレオンの行動である。彼は 1804 年、ローマ教皇によって冠されることになっていた。しかし彼は、教皇の手から冠を取って、自分で冠したのであった。

4-3 言語

ある種の言語——イタリア語、スペイン語、フランス語 (そして現代英語、しかしドイツ語やノルウェー語などゲルマン語系ではない) ——は、人間すべてに対するものとして男性の言葉を用いることによって女性の存在を見えなくさせている。非性的書法を求める重要な運動 (Miller & Smith, 1988) は、文化的暴力から逃れる慎重に企図された文化的転換である。何人かの勇敢な女たちが始めたとき、その仕事は不可能と見えたとに相違ない。

暴力がもっと見え難く、より陰伏している言語のより微妙な側面がある。インド・ヨーロッ

パ語族の諸言語の基本的特徴と、日本語および中国語との比較(Galtung & Nishimura, 1983)が、インド・ヨーロッパ語族諸言語によって負荷されている、空間および時間のある種の厳格性を明るみに出した。これに対応する、論理的な構造における厳密性は、妥当な推論への到達可能性に強い焦点を当てることによって得られる（ここから西洋が「論理的」であるとの自負が生まれる）。また、本質と現象を言語学的に区別する傾向があり、そのことが、本質の不朽性の余地を残し、現象にすぎないとしてそれを破壊することの正当性を含意することともなる。けれども、これは深層文化のことであり、暴力の三角形における底辺の階層のより深い層に関わることであるゆえ、直接的・構造的暴力との関連はより希薄になる。

4-4 芸術

1点だけ指摘しておこう。1967年の欧州共同体(EC)の後継としての現在の欧州連合(EU)の出現にとって重要であるから(Galtung, 1989c, ch.2)。ヨーロッパは自分自身をどう理解しているのか？ギリシャ神話の「エウロペー」に結びついた物語はあまり有用でない。非ヨーロッパ的環境の否定としてのヨーロッパ理解がわれわれをずっと遠くまで導いてくれる。

中世から近代への移行期におけるそうした環境とは、東方および南方に広がるあの巨大なオスマン帝国であった。それは、ウィーンの市壁に達し(1683年)、シリアとエジプトを征服し(1517年)、その後、トリポリタニア、チュニジア、アルジェリアを属領としたが、スペイン・ハプスブルク家の小さな包領とともに(その2つはまだそこにある)、スルタンのフェズおよびモロッコのみが残された。唯一の非「オリエント」(アラブ、ムスリムを意味する)は、貧困かつ空間的・時間的に広大なロシアであった。それは眠れる国であったものの、巨大であった(Larsen, 1988, pp.21, 23)。

このようにしてヨーロッパは、南方および南東方面に広がる敵の否定として自己を理解しなければならなかった。こうして「東方(オリエント)の専制」なるメタファーが展開され、それは依然としてヨーロッパ精神が「環境」を把握するのに顕著なものとなっている。典型的な「東方の専制君主」は、冷淡および専断を兼ね備える。彼が殺害したヨーロッパの君主のように。しかし彼は、法ではなく、自分の気まぐれによって支配する。性的には彼はハーレムを楽しむ。彼のヨーロッパの仲間、せいぜい田舎娘に夜陰に乗じて暴行を加えることしかできない。ムスリムはまた一夫一婦制にしばられない。フランスにおいて19世紀に現れた絵画の一派は、性そして／または暴力を背景に東方の専制を表現したのである。アンリ・ルニョーの「裁判なき処刑」、そしてウジェーヌ・ドラクロワの「サルダナパールの死」はその好例である。ヘーゲルもまた、東方的専制として東方的(アジア的)生産様式を否定的・単調的・停滞的に見た。マルクスもそうした見方を模倣した。

ヨーロッパ周辺のセミサークルの非アラブ的部分をなしたロシアも、東洋的専制として見られなければならなかった。そうした「専制」が叙述としてツァー体制に適合し得たことは、反駁し難いであろう。しかし、果して「東洋的」か？ともあれ、そうした描像はおそらく、何世紀にもわたってロシアおよびソ連に関するヨーロッパ的イメージに影響したであろう。

そして現在もそうである。もちろん、過去も現在も、意図的に不明瞭な言い方が行われている。

4-5 経験科学

文化的暴力の 1 つの例は、経済的行動の科学と自称する新古典派経済学のドクトリンであろう。アダム・スミスの伝統に強く影響され、新古典派経済学はそれ自身のドクトリンによって処方されたシステムを今や経験的に研究し、しばしば経験的な現実を確認される自己充足的な予言を見出す。新古典派的なドグマあるいは「通念」(conventional wisdom) の一部は、「比較優位」に基礎付けられた貿易理論である。もともとそれはデイヴィッド・リカードにより定式化され、ヘクシャー＝オリーソンおよびティンバーゲンによって発展させられた。このドクトリンは、どの国もその国が生産要素に関して比較優位を有する生産物によって世界市場に入るべきことを処方する。

実践的にはこのことは、天然資源や非熟練労働に豊かに恵まれた国は天然資源を採取すべきであり、他方、資本と技術、熟練労働と科学者に豊かに恵まれた国は天然資源を加工すべきだということを意味する。こうしてポルトガルは繊維産業をあきらめ、月並みなワイン製造者になり、イングランドは刺激すなわち自身の工業力をいっそう発展させるチャレンジを得るのである。こうしたドクトリンの結果は、今日における世界の垂直的な分業という形で大部分の人々が見るところのものである。こうして、国家間においても、国内においても、構造的暴力がいたるところに存在するのだ (Galtung, 1977, 1988b)。

こうして比較優位のドクトリンは、各国がその輸出生産物に与える加工の度合いに関して、世界におけるおおよそその労働の分割 (分業) を正当化する機能を果たしているのである。これは生産過程において各国が受け取るチャレンジの量にほぼ比例するから、比較優位の原理は、地理的および歴史的な理由から、生産要素のプロフィールが各国に負わせている現状の維持を宣告しているのだ。もちろん、法的であれ経験的であれ、各国の生産プロフィールを改善させるために国が行うべきことは何もない、といった法則は存在しない。日本の経済学者の赤松要はこの基本点を指摘した。¹⁸⁾ しかしそのような改善は容易ではない。天然資源／商品の所有者にとっては、現状維持による直接的な利得があるからだ。こうして比較優位の「法則」は、構造的に耐え難い現状を正当化する。要するにこの「法則」は、一片の文化的暴力であって、経済学のまさにコアに埋め込まれているのである。

4-6 形式科学

しかし、こうしたことは数学に関しては確実にはいえないのではないか？ ところが、それほど明らかではない。もし数学が 1 つの基本的なルール——定理 T とその否定 $\neg T$ とが同時に正しいことはあり得ない——をもつ形式的なゲームであると見られるのであれば、その帰結は暴力的なものとなり得るのだ。数学の論理が多価的な論理を追求するにしても、用いられる論理は、妥当と非妥当との間に厳密な線を引く二価的な論理である (排中律 *tertium non datur*)。

そして、それはそうしたものでなければならぬことは、容易に見てとれる。推論が数学的構

造物のモルタルであるからだ。それ（推論）は、*modus ponens*〔もし p は真であり、 $p \rightarrow q$ であるとする、 q は真である〕、および *modus tollens*〔もし q は偽であり、 $p \rightarrow q$ であるとする、 p もまた偽である〕を鍵となる手続きとしている（Galtung, 1988c, ch.4, esp. section 4.4）。

このことは、個人的・社会的・世界的な空間において、数学は白／黒的思考および分極化と
きわめて良く適合する 1 つの特殊な思考法にわれわれを訓練することを意味する。数学的
思考の「どちらかを」的性格は、数学をきわめて興味深く活気に満ちたものにする。しかし、
高度に弁証法的な人間的・社会的・世界的現実のモデルとしては、それは全く十分ではない。
そして、もし文化がわれわれをより暴力的でない可能な世界に導くものであるとするなら、
「十分性」(*adequatio*) が文化に対する象徴的世界の基本的な要求となるのである。

4-7 コスモロジー

われわれは、文化的暴力から暴力的文化の問題に戻ることにしよう。1 節で述べたように、
こうしたグローバルな判断は、宗教やイデオロギー的思考、言語や芸術、経験的・形式的科
学における広範囲なそして多様な文化の諸側面を識別することによって得ることができる。
それらすべては暴力の正当化に奉仕するのである。

さらに、もう 1 つのアプローチがあるのだ。いくつか存在するに相違ない深層文化を求め
て、文化の下部階層の探究である。¹⁹⁾ われわれはルーツのルーツ、いわば、文化的要素を
生み、それを通じてそれ自身を再生産する、文化の発生学的コードを探究するのである。こ
れはきわめて投機的な探究にならざるを得ないものの、それほど問題含みではない。より深
い階層を仮定し、その含意を引き出し、縁をめぐる理論のハードコアを検証することは科学
の本質に属するからである。

コスモロジーの概念は、現実に関するより深い仮説である下部階層を取り入れるために構
想されたものであり、何が正常かつ自然かを定義するものである。集合的下意識のこの深層
レベルでの仮説は容易には見つからないし、掘り起こすことはいっそう困難であろう。²⁰⁾
しかし、西洋の文化が示す多くの暴力的な諸相はこのレベルにおけるものであり、このゆえ
に、文化が全体として暴力的に見え始めるのである。

選民意識があり、中心－周縁の強い傾斜がある。緊急を要する「今や、世の終わりが来た」
シンдрロームがあり、緩やかなそして辛抱強い構造的・直接的平和の構築・立法化をあらか
じめ排除するのである。演繹的連鎖をとまなう原子論的、二元論的思考が、手段と目標の一
体化とは正反対の方向に働く。自然に対する尊大さが、生命の一体化とは正反対の方向に働
く。人間を個人化し、位置付けする強い傾向が、人間の一体化をバラバラにする。そして、
恐ろしい継承者をとまなう超越的かつ絶対的な神が存在する。

文化全体が暴力の巨大な潜在力を所有し、それはより明白な文化のレベルで表現され、正当
化不可能なものを正当化するのに利用されるのである。西洋において平和もあるというこ
と、そしてそのことが時には西洋に発してさえいるということは、およそ奇蹟的であり、お
そらくそれはよりソフトな層によるのであろう。

問題は、このタイプの思考が容易に絶望の感覚につながることである。文化の発生的コードを変えることは、少なくとも生物の発生的コードを変えることと同じに見えるのである。さらに言えば、もし変更が可能だとしても、遺伝学的エンジニアリングが示すように、文化的エンジニアリングも同様に暴力的なものとなろう。「偶然」に任されたなら、つまりは権力と特権を有する者に任されたなら、一体何が起こるのか？²¹⁾ 将来の平和研究にとってこれは困難かつ重要な課題である。

5 ガンディーと文化的暴力

直接的および構造的暴力の両者に対するオルタナティブを探究するのに開いた心を有していたガンディー自身は、こうした狭窄な問題に関して何か言うべきことがあっただろうか。彼の回答は、彼のエキュメニズムから、ある意味においてガンディーズムを要約する 2 つの公理を再生産することであった。すなわち、生の一体性および手段と目標の一体性である。もし生、とりわけ人間の生は、目標のための手段にはなり得ないということが仮定されるなら、第一の公理は第二の公理に従うであろう。もし目標が生そのものであるのであれば、手段は生を向上させるものでなければならない。

ところで、われわれは一体性ということをどう理解すればいいのか。合理的な 1 つの解釈は、前節で展開されたアイデアを使えば、疎遠に対して親密性に関わるものであろう。

われわれの精神的宇宙においては、生とりわけ人間の生のあらゆる形態は、親密であることを享受すべきであり、社会空間にくさびを打ち込む「自己」－「他者」の険しい傾斜によってバラバラにされてはならないのである。たとえば、「選民」として神に召されているといった文化の固い核からとられた

いかなる正当化も、それがよりいっそう高くて固い公理と両立し得ないならば、排除されるであろう。

手段と目標の一体化は、相互に近い関係にある諸要素、すなわち行動 (acts) と、行動にもなう事実 (facts) とをもたらし。それらの要素は、社会的時間にくさびを打ち込む長い因果的連鎖によって切り離されてはならない。

離陸または革命、すなわち産業への投資または工業プロレタリアートの創出によって、長い社会的継続を立ち上げることは、十分に良いとはいえない。手段はそれ自身において良くなければならない。それは、道のずっと向こうにある遠い目標という関連においてではない。このことは、「成長／資本主義」や「革命／社会主義」という名のもとにおける、産業という祭壇の何百万人もの犠牲者によって証言されてきた。「うまく行く」という経験的確信から引き出された正当化は、それがより高いそして「より強固」でさえあるこの定理と矛盾するとき、排除されるのである。

「自己－他者」のいかなる傾斜であっても、価値のスケールでずっと下位の者に対する暴力の正当化に利用され得る。どのような因果的連鎖であっても、非暴力的な目標を達成するのに、暴力的な手段をもち得ることを正当化できる。ガンディーは、1 または 2 世代を明後日の想定された至福のために犠牲にする、革命とその困難な仕事のマルクスの思想に懐疑的

であったに相違ない。それは、1 または 2 つの社会的階級を今日の上層階級の至福のために犠牲にする、困難な仕事と企業家精神との自由主義的／保守的な思想に懐疑的であったであろうことと同じである。

ガンディーによってこれら 2 つの公理から引き出された結論は、すべての生命の聖性への畏敬であり（ここから菜食主義がとられた）、「手段を大切にしないで、そうすれば目標は自らを大切にするでしょう」との教訓の受容であった。

こうして生命の一体性の教義は、「エコロジカル・バランス」の教義と非常に異なったものになる。というのは、それは単に人間の生命だけではなく、すべての生命を高めることを、ある宗教またはイデオロギーによって選ばれた（ガンディーにとっては、歪められ誤解された）カテゴリーではなく、すべての人間を高めることを意味するからである。そして手段と目的の一体性の教義は、動力の起動と認定される 1 つの大きなステップの通時性ではなく、同時性の教義に、すなわちすべての論点に関わる仕事を同時に行うことに導くであろう。²²⁾ そのアーキタイプは次のようである。あるものに他よりも多くの焦点を当てるキリスト教のピラミッドではなく、思考・発話・行動の各要素が傾向として同じレベルの優先度にある仏教の車輪である（つまり信仰と行動との関係である）（Galtung, 1988, ch.1.1, esp.pp.25f）。

6 結論

暴力は、直接的・構造的・文化的暴力の三角形のどの角からも発生し得、他の角に容易に伝搬可能である。暴力的な構造が制度化され、暴力的な文化が内面化されるとともに、直接的暴力もまた制度化される傾向にある——繰り返され、儀式化される復讐のように。

暴力の三角形の行動様式は精神の中で、平和の三角形の行動様式と対比されるであろう。そこでは文化的平和が、多様な相手との間で共生的・衡平的關係をとまなう構造的平和、および協力・友情・愛の行動をとまなう直接的平和を生じさせるのである。

平和の三角形は悪循環ではなく好循環であることが可能であって、相互に補強さえしあう。この好循環は、3 つの角に同時に働きかけることによって得られるものであり、1 つの角の基本的な変化が他の 2 つの角において自動的に変化をもたらすとは想定されない。

ところでこうした文化の包摂が、平和学のアジェンダをかなり広げてしまうのではないだろうか。もちろんそうだ。平和の研究が、たとえば健康学（医学）よりなぜより狭くなければならないのか。平和は健康よりもより容易なのか。より複雑ではないだろうか。さらに、生物学すなわち生命の研究はどうか。物理学すなわち物質の研究はどうか。化学すなわち物質の組成の研究はどうか。数学すなわち抽象的な形の研究はどうか。これらすべての領域はかなり広いものだ。平和研究はなぜより控え目でなければならないのか。

暴力および平和に文化が関係しているのであれば——そしてそれは確かにそうだ——、直接的・構造的暴力の多くの側面に捧げられた無数の研究のように、洞察力のある粘り強い探究から文化を排除できるのは独断的な精神だけであろう。唯一つ新しいことは、人文学、思想史、哲学、神学などに新しい領域を開くということである。換言すれば、新しい学問分野を、平和の探求に、すなわちその分野の既存の研究者を少しばかりの編成替えに招待するの

である。

そしておそらく平和学は、アカデミックな研究の殿堂に明らかに欠けている、重要な科学的事業の土台を築くのにならぬほどの貢献ができよう。すなわち、人間文化の科学、「文化学」(culturology)である。今日、そうした分野は、「高い」文化に対しては「人文学」、「低い」文化に対しては文化人類学に分割されている。そして哲学、思想史、神学等の断片が、その隙間を埋めている。

「文化的暴力」の概念はそのすべてにわたるものである——ちょうど「構造的暴力」の概念が社会科学のすべての範囲にわたるように。平和研究は多くの学ぶべきものがあり、取るべきまた受け取るべき多くのものがある。おそらくわれわれは、多様性・共生・衡平の精神において、やがていくらかの貢献ができることだろう。

* 本稿は、次の様々な場所で行われたレクチャーの報告である。At the University of Melbourne, Peace Studies Group, March 1989; at the Summer Schools in Peace Studies at the University of Oslo and the University of Hawaii, July 1989; and at the International Peace Research Institute, Oslo, August 1989. 私はこれらすべての場所での討論者たちに多くを負っている。

注

1) こうして「文化的暴力」は、このジャーナルで20年以上前に導入された「構造的暴力」の概念の足跡をフォローするものである。最近の非常に建設的な批判およびこの概念の1層の展開を企図する努力についてはRoth(1988)を見られたい。同様の概念はSaner(1982)においても紹介されている。

2) 「新しい人」(そして女?)を創造しようとする多くの努力が行われてきた。西洋においては、キリスト教の新しい枝はこうした努力である。ヒューマニズムもそうだし、ソーシャリズムもそう。しかし他の人々に1つの文化——それがいかなる文化であれ——を教え込もうとするのは、それ自身が直接的暴力の行為である(アクターにも意図にもよるから)。このことは通常、1つの文化からの脱社会化、そしてもう1つの文化への再社会化が行われることである。これには、若年の(無防備な)子供に対する最初の社会化も含まれる。ところで、文化が人間にとっての不可欠な条件(*conditio sine qua non*)であり、われわれは何もなしでこの世に生まれ(ただ生得の資質のみをもって)、しかも教え込むことは暴力であるとするならば、われわれは教育の基本的な問題に向き合うことになる。動詞‘educate’は他動詞なのか自動詞なのか? もちろん両方であり、どちらの解釈も可能である。

社会化を含む平和的教育(peaceful education)には、以下で議論されるように、おそらく多文化へのエクスポージャーそして対話が含意されている。キリスト教もヒューマニズムもこの点で良いとは言えない。実際、われわれはそれをいかに行うかを未だ知らないのである。ここで注意されるべきは、誰かに文化を押し付けること、それが直接的にまたは構造的に行われるのであれ、ここでいう文化的暴力の概念が意味するものではない、ということだ。そうした押し付けを正当化するような文化の諸側面、たとえば、なぜならその文化は「より高

度（一神論的、現代的、科学的等）である」から、といった正当化は、その文化にビルト・インされた文化的暴力であり、すなわち文化的暴力であるのだ。「暴力の経験的または潜在的正当化」が文化的暴力への鍵なのである。

3) われわれは概略的に、支配のメカニズムを、内面的と外面的、積極的と消極的とに区別してみよう。内面的について積極的と消極的とを、良い意識および悪い意識にそれぞれ同定するのである。同様に外面的について、積極的な外面性を報酬、消極的な外面性を懲罰に同定する。「内面化」とは、個人システムに深く根差した意識であり、「制度化」とは社会システムに深く根差した懲罰／報酬である。両者とも、行動が「自然に」「正常に」「自発的に」発現させるように働く。この初歩的な社会科学の1片は、文化的・構造的暴力を一般的な社会科学構築の中心に位置させるであろう。

4) 3つのシステム（単にヒトラーリズムやスターリニズムではなく、いま「グラスノスチ」のもとで周知のリビジョニズムも含めて）の比較については、Galtung（1984）を見られたい。

5) 神道の選民意識のテーマをめぐって〔他の宗教との〕強い類似性が見られる。こうしたことの分析については、Ienaga（1978）を見られたい。とりわけ、八紘一宇の観念（世界の八角を1つの家とすること）についてはp.154を参照のこと。

6) すべての「副作用」を入口の階段のところで投げ捨てる安易なアプローチは、概念的、理論的、実践的に、それを浄化しておかねばならないことを要求する。経済学はこうしたことを行う傾向がある。

7) 1948年の世界人権宣言、1966年の2つの国際規約および選択議定書からなるドキュメント。この文書は、それにふさわしい立ち位置をまだ獲得していない。理由としてはとりわけ、米国が契約条項を未だ批准していないことがある。

8) ゆえに環境の退化は、脱工業化および脱商業化によって阻止されねばならない。この主要なグローバルな問題に対して、つぎはぎ細工のアプローチのような、1つのタイプの汚染または枯渇を別のタイプに置き換えることによってではなく。

9) こんなにも小国と大国間の北方のあの国境が、いかに平和であったかはむしろほとんど信じがたいほどである。ある人々からは、「権力の真空」をうめることが熱心に思慮されていた。

10) もちろんこれは、ストックホルム国際平和研究所のSIPRI年鑑その他の公刊物によって採用された一般的なアプローチである。表面的なレベルにおいては非常に有用な文献である。けれども、想像されるべきそして実行されるべき本当の対抗手段にとっては、それがいかなるものであれ、十分に理解を深めてくれるといったものではない。

11) これらの要素は日本の侵略性を説明するものとして非常にしばしば重要とされる。たとえば、Benedict（1972）、Ienaga（1978）はこれらの要素を引用している。

12) 路面電車が東京の皇居を通り過ぎるとき、乗客は立ち上がり、天皇に向かってお辞儀をするのを常としていた。そして神道の靖国神社は、いまもなお日本における国家のそして

国家主義の主要な中心であり続けている。1989 年 7 月 23 日の自由民主党の敗北後、新しい海部首相は、1945 年 8 月 15 日の降伏を記念する終戦記念日に靖国神社に参拝しなかった。左の方からより風が吹いていることを彼はよく知っていたからである。

13) 米国の予備将校訓練部隊 (Reserve Officers Training Corps: ROTC) に関して、ミリタリーと大学とのこのように深い一体化のこれほど明らかな例を私は他で見たことはない。そこでは、ミリタリーが学生を奨学金で買い、教室を軍関連の情報で満たしていた。

14) 同等の重要性をもつ神学上のもう 1 つの区別は、われわれは原罪 (original sin) とともに生まれて来た (かなりのキリスト教徒が主張するように)、「原恵」 (original blessing) とともに生まれて来た (その他のキリスト教徒が主張するように)、「どちらをも」 (ヒンドゥー教徒や仏教徒のカルマの思想の立場?)、「どちらでもない」 (無神論者) か、である。超越的な神 (God) と原罪との結合は、ルターがよく理解していたように、人々を支配するのに巨大な意味をもった。

15) 詳細は Galtung (1989a, ch.3; 1989b) を参照のこと。選民意識の主題に関する優れた研究は、Weber (1971) を見られたい。

16) これは魅力的なそして恐ろしいディストピア的な小説のテーマである。私はこの参照を Carolyn DiPama に負っている。

17) あまりオリジナルではないが、私の立場はこうである。胎児は生命である。ゆえに神聖である。故意かどうかにかかわらず、生命が破壊される状況を回避するために可能なすべてのことが行われるべきである。すべての代替案が出尽くしたとき、その生命を創造した者——通常は男と女——に決定はゆだねられる。その場合、女には拒否権を行使する権力と男に相談する権利が与えられる。

18) 彼の基本的な立場は単純に言えば次のようである。わなから抜け出すために、蓄積されたすべての剰余価値を、生産要素の所有者の奢侈的消費のためにではなく、生産要素の改良のために充当せよ。単純かつ賢明だ。これはまさに日本が行ったことだ。しかしこれは、今日の日本が、他の多くの国々がそれを行うことを決して見たいとは思わないことにほかならない。

19) ポスト構造主義者の 1 つの重要な立場は次のようだ。表面の下を深く掘り下げること、は、多様から単一への移行ではない。たとえば、「西洋の深層文化」は曖昧ではなくて明白である、ということはある得ない。私なら次のような議論をするだろう。キリスト教は、少なくとも 2 つのリーディング (読み方) に関わることに於いてのみ理解することができる。ハードなリーディング (より超越的、原罪志向)、およびソフトなリーディング (内在的、「原恵」志向) である。多くの人々は深層文化のより複雑な多様性を〔写真右端が切れており判読不能〕。しかし、「1」から「2」への 1 ステップは必要条件である。

20) コスモロジーを粗く定義すれば次のようだ。それは、文明の深層文化における一般的な仮説であって、深層構造下にある一般的な仮説をも含み、何が正常であり自然であるかを定義するものである。

21) 文化、とりわけ深層文化が、その文化が陶冶され新しい形に造り直されるために十分な可塑性 (Scholem) をもつのはどのようなときか？ 危機のときなのか？ 深いトラウマを負わせられたり、深いトラウマを他者に加えることのトラウマを負わせられたりする、その後のことなのだろうか？ これらがきわめて重要な問題であることの認識を除いて、われわれはほとんど何も知らないのだ。

22) ガンディーの生涯を見てみよう。彼が引き受けた政治的アジェンダは、互いに交錯していた。自治 (*swaraj*) [の追求]、真理把持 (*satyagraha*) と発展 (*sarvodaya*) との探究、南アフリカのインド人・インドの不可触民 (*harijans*)・女性の向上、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒との連帯闘争。どの時点においても、ガンディーは次のように言うことを決してしなかった。すなわち、「私はこれらのうちの 1 つに集中しよう。そうすれば、ほかはついてくるだろう」。

参考文献：

Atwood, Margaret, 1987. *The Handmaid's Tale*. New York: Ballantine.

Benedict, Ruth, 1972. *The Chrysanthemum and the Sword*. London: Routledge. [Originally published in 1946.]

Galtung, Johan, 1969. 'Violence, Peace, and Peace Research', *Journal of Peace Research*, vol.6, no.3, pp.167-191.

Galtung, Johan, 1971. 'A Structural Theory of Imperialism', *Journal of Peace Research*, vol.8, no.2, pp.81-117. [Reprinted in Galtung, 1980b.]

Galtung, Johan, 1977. *Methodology and Ideology, Essays in Methodology*, vol.I. Copenhagen: Ejlers.

Galtung, Johan, 1978. *Peace and Social Structure, Essays in Peace Research*, vol.III. Copenhagen: Ejlers.

Galtung, Johan, 1980a. 'The Basic Needs Approach', pp.55-125 in Katrin J. Lederer; David Antal & Johan Galtung, eds, *Human Needs: A Contribution to the Current Debate*. Cambridge, MA: Oelgeschlager, Gunn & Hain; Königstein: Anton Hain.

Galtung, Johan, 1980b. *Peace and World Structure, Essays in Peace Research*, vol.IV. Copenhagen: Ejlers.

Galtung, Johan, 1984. *Hitlerisme, stalinisme, reaganisme. Tre variasjoner over et tema av Orwell* [Hitlerism, Stalinism, Reaganism. Three Variations on a Theme by Orwell; in Norwegian]. Oslo: Gyldendal. [English edition forthcoming.]

Galtung, Johan, 1988a. 'How Universal Are the Human Rights? Some Less Applaudable Consequences of the Human Rights Tradition.' Paper prepared for the Nobel Symposium on Human Rights, Oslo, June.

Galtung, Johan, 1988b. "'A Structural Theory of Imperialism" Ten Years Later', pp.289-310 in *Transarmament and the Cold War: Peace Research and the Peace Movement. Essays in*

- Peace Research*, vol.VI. Copenhagen: Ejlers.
- Galtung, Johan, 1988c. *Methodology and Development, Essays in Methodology*, vol.III. Copenhagen: Ejlers.
- Galtung, Johan, 1989a. 'The "Middle East" Conflict', ch.3, pp.37–57 in *Solving Conflict: A Peace Research Perspective*. Honolulu, HI: University of Hawaii Press.
- Galtung, Johan, 1989b. *Nonviolence and Israel/Palestine*. Honolulu, HI: University of Hawaii Press.
- Galtung, Johan, 1989c. *Europe in the Making*. New York and London: Taylor & Francis.
- Galtung, Johan & Fumiko Nishimura, 1983. 'Structure, Culture and Languages: An Essay Comparing the Indo-European, Chinese and Japanese Languages', *Social Science Information*, vol.22, no.6, December, pp.895–925.
- Ienaga, Saburo, 1978. *The Pacific War: 1931–1945*. New York: Random House.
- Krippendorff, Ekkehart, 1985. *Staat und Krieg, Die historische Logik politischer Unvernunft*. Frankfurt: Suhrkamp.
- Larsen, Morgens Trolle, 1988. 'Europas Lys', pp.9–37 in Hans Boll-Johansen & Michael Harbsmeier, eds, *Europas Opdagelse*. Copenhagen: Ejlers.
- Miller, Casey & Kate Smith, 1988. *The Handbook of Nonsexist Writing*. New York: Harper & Row (2nd ed.).
- Roth, Michael, 1988. 'Strukturelle und Personale Gewalt: Probleme der Operationalisierung des Gewaltbegriffs von Johan Galtung', *HSFK Forschungsbericht*, no.1, April 1988.
- Saner, Hans, 1982. 'Personale, Strukturelle und Symbolische Gewalt', pp.73–95 in *Hoffnung und Gewalt. Zur Ferne des Friedens*. Basel: Lenos & Z Verlag.
- Weber, Hans Ruedi, 1971. 'The Promise of the Land. Biblical Interpretation and the Present Situation in the Middle East', *Study Encounter*, vol.7, no.4, pp.1–16.

